☆NHK アナ→福祉施設 私の学び直し 1 内多勝康

（週刊東洋経済） - Yahoo!ニュース　2/17(土) 7:01 配信

＞　＜2018 年 2 月 17 日号＞　NHK のアナウンサーとして、「生活ほっとモーニング」などのキャスターを務めた内多勝康さん。今は、在宅で医療的ケアが必要な子どもの短期入所施設「もみじの家」のハウスマネージャーとして働く。“朝の顔”が 50 代で転身したきっかけには、ある学び直しがあった。

53 歳を目前に控えた 2016 年春、30 年間勤めた NHK を早期退職し、福祉施設の職員として働き始めました。もともと安定志向なのに、われながら思い切ったなと思います。今の主な仕事は、予算など事業計画の策定と、メディア対応や講演会といった広報活動です。

福祉の世界との出会いは、新人アナウンサー時代に高松でボランティア協会主催のお祭りの司会を務めたことでした。そこで初めて、障害を持つ方々と濃厚に接したのです。それ以来、制度の不十分さに対する考えや生きづらさといった本音を協会の方々から伺い、福祉に関する番組企画を次々と提案していくようになりました。

東京転勤後に、ある番組で自閉症を持ちながら公務員として働く男性を取材しました。老人ホームの風呂をピカピカに掃除し、タオルをきれいに畳み、職場にもなじんでいる姿を見て、「働く環境を整えれば『この人は障害が重いから』と、さまざまな選択肢をあきらめずに済むのだ」と気づきました。福祉の世界でやっていこうと考えるようになったのはこの頃です。

■専門性高い福祉の現場　40 代後半で学び直しへ

福祉の専門家や現場の方々を取材していると、勉強をしたうえで臨んでも専門用語についていけず、何を言っているのかわからないという挫折を味わうことがありました。体系立てて学びたいと思い、名古屋勤務時代の 11 年春、48 歳になる直前に、通信制の専門学校で学び始めました。

毎日レポート提出の課題に追われ、福祉施設での実習もあったので負担は大きかったですが、大学時代に戻ったようで、ワクワクしながら取り組みました。単身赴任 4 年目で仕事がある程度落ち着いていましたし、これといった趣味もないので、時間をつくりやすかったのだと思います（笑）。

2 年後に国家試験をパスして、支援を必要とする人を、支える人材や制度につなぐ社会福祉士の資格を取りました。当時は「資格を持っていたほうが、定年後に道が開けるだろう」くらいにしか考えていませんでしたが、その資格取得が、思いがけず定年前の転職を実現させる追い風になりました。

「もみじの家ができる。医療関係ではない人を雇いたいらしい」と教えてくれたのは、取材を通して知り合った愛知の社会福祉法人の理事長でした。専門学校時代に実習の場を提供してくださった方です。何かのために助走をしている間は、それが助走だとは気づかないものですが、すべてはつながるんですね。

今は 54 歳。60 歳までに、第 2 のもみじの家の計画が立ち上がるというニュースを見ることが夢です。そのためにまずは、もみじの家の収支を安定させてモデルケースにしないといけません。60 歳以降も、子どもの福祉にかかわれたら幸せです。

…などと伝えています。